

Interview part 1 インタビュー

日本エッセイスト・クラブ会員

佐藤 きむさん (写真左)

書道家

吉澤 秀香さん (写真右)



弘前中央高校を卒業するまで弘前市で過ごした佐野さん。当時、ぬいちゃん、きんちゃん、にが（※）と呼び合い、6年間学生生活を共にした佐藤きむさんと吉澤秀香さんから佐野さんとの思い出話などを伺い、佐野さんの人柄に迫ります。

（※）にが…吉澤さんの旧姓“二唐”から取ったあだ名。

入学当初は戦争中

吉澤さん 弘前高等女学校（旧制中等教育学校・現弘前中央高校）に入学したときは、戦争中でしたので、雨が降れば勉強をして、天気の良いときは樹木地区にあった女学校の農場で農耕作業をして野菜などを植えました。そして、野菜が育つとクラスの生徒みんなで分けて食べました。食べるものがない時代でした。

好きなことに打ち込んだ毎日

吉澤さん 終戦を迎え、女学校での学生生活を自由に楽しめるようになりました。クラブ活動もできるようになって、私は書道部を立ち上げ、好きな書道に打ち込み、ぬいちゃんはたくさんの絵を描いていました。

佐藤さん ぬいちゃんは昔から絵が素晴らしく上手で、勉強もよくできる人でしたが、その他はごく普通です。映画が大好きで、特にフランス映画にハマっていました。その頃からパリに憧れていましたね。

変わらない人柄

佐藤さん 大学生のときに仲間と奈良県の旅館に泊ると、偶然ぬいちゃんも女子美術大学の仲間と泊まっていたことがありました。誘われた余興の会で、絵の具を顔に塗って楽しそう

に踊り、標準語で話すぬいちゃんを見て「住む世界が違ってしまった」と思いましたが、弘前に帰省したときには、百石町にあったぬいちゃんの実家で、津軽弁でとりとめのないおしゃべりする「明るくユーモアに富んで穏やかな」昔のぬいちゃんのままでした。

友達思いのぬいちゃん

佐藤さん ぬいちゃんは女子美術大学の学長になっても、「実るほどこうべを垂れる稲穂かな」のことわざのとおり、まったく偉ぶることのない人でした。私が東京へ遊びに行くときには、時間をつくって必ず会いに来てくれました。

吉澤さん 東京で書の展覧会を開くと、ぬいちゃんは必ず初日に来てくれました。私がその場で書を書くときは、一番前に来て「にが！頑張れ！」と声援を送ってくれて、すごく嬉しかったです。

叶った2人の夢

吉澤さん ぬいちゃんと「いつか東京で二人の展覧会をやるべし」と話していました。上野の森美術館で開催された展覧会で、ぬいちゃんは絵の部門で、私は書の部門で選ばれ、初めて同じ会場に作品が展示されました。二人展はできませんでしたが、「やっと揃って展示できたね」と話したことが忘れられません。

Interview part 2 インタビュー



小倉 文子さん (女子美術大学学長)

女子美術大学を卒業後、洋画家として制作活動に励んだ佐野さん。同大学の助手としても指導を始め、学長まで務めました。

現在、学長を務めている小倉文子さんから、画家として、教育者として活躍した佐野さんについて伺いました。

女性画家の第一人者

今でこそ女性も増えましたが、佐野先生が活動を始めた頃の美術界は男性社会でした。作品展で賞を取ることは女性にとって大変な時代で、ましてや作品展の審査員を務めるという女性は、なかなかいませんでした。その中で、早くから作品展の審査員を務めたことが何度もあり、とても誇りに思います。

佐野先生は数々の賞を受賞しました。その中の1つである、損保ジャパン東郷青児美術館大賞の受賞後に開催された同美術館での展覧会の入場者数は、過去最高を記録し、当時話題になりました。

お別れの会では、美術界を代表する画家たちが「佐野先生の秀でた感性、感覚の鋭さは真似できるものではなく、心からうらやましいと思っていた」とおっしゃいました。

教育者としての自信

佐野先生が学び、教員として勤め、学長にまで

なった女子美術大学は、女性のための美大であって、女性の自立ということをうたっています。

学生一人一人の個性を見だし、良いところを引き出して絵描きとして自立させることに、教員としての揺るがない信念をもって取り組まれ、決して手を抜くことはありませんでした。

画家と教育者の両立を叶えたもの

佐野先生は、自身が第一線で活躍する画家でなければ、学生の前には立てないと強く思っていました。画家として高い評価を受けているからこそ、その指導を受けたいという学生が集まる。そのどちらか一つでは成りたちません。画家と教員の両方の活動を続け、やり遂げるためにさまざまな努力をしていました。

やり通すためには周りの助けもたくさん必要であったはずですが、佐野先生には周りの人に先生を手伝おうと思わせるほどの魅力がありました。持って生まれた感性と努力、その人柄によって、最後まで画家であり、教育者であり続けました。



◀▲【1970年代】女子美術大学での洋画家指導の様子

“どんな学生でもその才能を見いだし、絵描きとして立派に送り出すことができる。”